

## 原告 中村涼夏 意見陳述

2025年6月23日

私は中村涼夏、23 歳です。

鹿児島県で生まれた私は、幼少期から環境問題に興味を持ち、科学者や NGO 職員で環境保護に関する研究や活動を行うことを夢見ていました。私が 17 歳のある日、私より年下の少女が、気候変動対策を求めてスウェーデンで学校ストライキを行っていることを SNS で知りました。そこから気候変動解決の喫緊と重要性を理解した私も活動を始め、主に行政や国会議員に働きかける活動を行ってきました。

現在は公益財団法人の研究員として洋上風力発電政策の研究に携わっております。

提訴から 2 年。この間、私は持続可能なエネルギー社会を求めて、政治にアプローチをしてきました。でも、私がいま感じているのは、いくら努力をしても報われることがない徒労感です。

昨年 7 月から今年 2 月にかけて、若者や将来世代の声を反映した 2040 年のエネルギー政策や気候変動政策に反映させることを目指して活動してきました。1.5 度目標に整合した対策、持続可能なエネルギー社会の実現に向けて、国会議員や省庁の方々と話し合いを重ねて来ました。

私たちの活動を通して、政府の一部に変化が見られたことも事実です。しかし、2040 年までの気候変動・エネルギー政策は本年 2 月に閣議決定され、私は一国民として、この決定に関与できなかったと感じています。

シンクタンクの調査によれば、今回の 2040 年までのエネルギー計画の議論を行った審議会の委員の過半数は 50 代以上であり、30 代以下の委員はわずかでした。気候変動の問題は科学的にも、「いま、すぐに」温室効果ガスの大幅な削減策を講じる必要があるとされています。つまり、ここ数年の政治的な決定が私たち若者の未来を左右する状況なのです。そんな中で、未来を生きる私たち若者が意思決定の場から排除されている現状は、極めて不当です。

「もし被選挙権年齢が 18 歳だったとしたら。」と、私はもう一つの日本社会を想像してしまいます。みなさんはソフィーさんを覚えておられるでしょうか。第 5 回期日で陳述書が提出された、ニュージーランドで最年少の 18 歳で当選した地方議員です。ソフィーさんの存在は、私にとって衝撃でした。彼女は私と同じ 2019 年に気候変動活動を始めましたが、その後、ニュージーランドで議員となり、政策決定者として直接関わっています。一方、私は被選挙権がないため、今回のエネルギー計画も、温暖化対策も直接的に関わることはできませんでした。この違いは、年齢や経験ではなく、ただ立候補する権利の有無という一点にあります。

もし被選挙権年齢が 18 歳であれば、私も政治家という選択肢を持ち、今回の計画がより良いものになるよう直接働きかけることができたかもしれません。直接声を届ける手段を得て、日本の未来に希望を持つことができたはずです。

しかし、現実はそうではありません。2040 年までの計画は既に決定され、失われた時間と若者がいない中で決められてしまった将来の計画を思うと、今も深い悲しみと悔しさを覚えます。

しかし、未来を諦めるわけにはいきません。現在も、気候変動の危機を訴え、社会

課題と向き合い、変革を求める若い世代が日本でも次々と現れています。彼らが、  
私たちが味わったような徒労感や無力感、そして大人への失望を感じることなく、  
自らの手で未来を切り開ける社会を実現するために、被選挙権年齢の早急な引き下  
げを切に願います。

この裁判を通して、その一歩となることを信じています。

以 上